会長講演

イタリア・パビア大学の解剖医たち

（スカルパ、コルチ、ゴルジ）

原田康夫

パビア大学はヨーロッパでも最も古い大学の一つで、八五〇年には大学の前身が出来、一二五〇年にはすでに医学校が出来ていた。私は昭和四十年に、パビア大学に留学し、古い大学の歴史の一端に触れる事が出来て、以来医学史に興味を持つ様になった。

今回は、パビア大学の多くの解剖学者の中から、私の専門の耳鼻科に最も関係の深い、スカルパ、コルチ、ゴルジについて一般にはあまり知られていない一端を披露した。

Antonio Scarpa（一七四七～一八三二）は、パビア大学の解剖学教授で、後に外科学の教室を開いた人である。聴器の研究で有名で、彼の名のついた内耳の部分には、正円窓膜（第二鼓膜、スカルパの膜）、前庭神経節（スカルパのガングリオン）がよく知られている。パビアの外科学教室の入口には、初代スカルパ教授から、今日までの教授の名が銅板に刻まれ、その歴史の古さに羨ましさを覚えさせられるものである。

中でも、パビア大学の本部の方には、昔の講堂と医学博物館が残っている。ここには、スカルパが作った人体標本のあらゆる部分が乾燥し、ニカワで処理されて、所せましと陳列してある。彼はおそらく、すばらしい教育者であったのであ

ろう。その人体標本は如何にして作られたのか、形態は生き生きとして、あらゆる角度からも観察する事が出来る様に胸部、腹部の臓器がありのままの状態で切断して作られている。勿論、聴器に関しては、ドリルもない時代に、複雑な骨迷路の標本をいくつも作っており、更には木で大きな模型まで作っている。

この博物館で最も驚くべき事は、彼の生首と足がアルコール漬けして保存されている事である。スカルパは死後一旦埋葬されたが、弟子のパニッツアにより掘り起こされ、解剖されたとの事である。何故、先生の首を残したかについては二つの説があり、現在でもどちらとはいえないようである。一つは、あまりにも厳しい先生であったので、弟子のパニッツアにより首と足が恨みをこめて切りおとされ、保存されたという説と、もう一つは、あまりにも偉大な先生の顔を後世に伝えたかったという説とである。いずれにしても、パニッツアのお蔭で、偉大なスカルパ先生の顔に私は何度か対面出来たのである。

次に聴器の最も大切な部分であるコルチ器は、Alfonso Corti（一八二二—一八七六）により発見された。彼はやはりパビア大学で学んだが、スカルパが死んだ時には十歳であった。彼の教えは受けていなかった筈である。多分、パニッツアかその弟子くらいの時代の学生であったのであろう。彼の論文は、Recherches sur l'organe de l'ouie des mammifeies. 2. Wiss. Zool 3. 1851 に記載され、我々は今日、ラセン器の事を、コルチ器と呼んでいる。後に彼は、ウィーンに行き、解剖学教授になったときいているが、このあたりのことについては、定かでない。案外、コルチに関する研究は少ない。

彼は、大変器用な人で、内耳の微細解剖を行っていたが、リュウマチの多いロンバルド地方で生活していたためか、晩年はリュウマチにかかって指が不自由になり、遂に故郷のパビアの近くに帰って、百姓をしたということである。

最後に、Camillo Golgi（一八四三—一九二六）であるが、彼については比較的よく知られている。ゴルジは、フクロウの小脳を渡銀染色して観察している際に、プルキンエ細胞体内に存在する、網状構造を発見して、一九〇六年にノーベル賞をもらっている。これがゴルジ装置である。現在、パビア大学の病院の入口には彼の胸像が安置されてあり、解剖学教室

には当時のプレパラートも残っている。組織学と病理学の教授として、パビア大学の最も誇るべき人物である。彼等の仕事が、日本の医学にどの様に影響したかを知る事も興味があり、これらの三人物の研究について述べ、当時の彼等の研究が、今日の電子顕微鏡の発達によって、いかに詳細に観察されるようになったかを示した。

（広島大学耳鼻咽喉科教授）